

東北方言発話動詞シャベルとカタルの特徴的用法

中道 知子 (大東文化大学外国語学部)

Distinctive features of the verbs of utterance *shaberu* and *kataru* in the Tohoku dialect of Japanese

Tomoko NAKAMICHI

[要旨] 筆者は、中道知子(2013)において、東北方言シャベルとカタルの意味・用法が共通語に比べて特徴的であり、共通語イウとハナスの領域を大きくカバーすることについて述べた。その後、筆者の指導の下で、東北方言話者であるゼミ学生がとカタルを取り上げた論文である加藤雅啓(2020)が発表され、東北方言カタルの特徴的用法についての情報が充実した。本稿では、その新しい知見を加えて、東北方言シャベルとカタルの共通語とは異なる特徴を整理した。中道(2013)と共通する資料については、より分かりやすいように配列を改編した。

データとした言語資料の多くは、直接の調査ではなく刊行されている方言談話資料である。共通語と方言の語形が同一である語においては、方言か共通語かの区別が話者の内省によれば不明になりやすいが、当該語の使い分けに意識が向けられているのではない自然会話場面における用例を対象とすることによって、その問題を回避する方法として有効である。

1. 問題提起

発話動詞とは、次の5つの類義語を意味する。「言う、話す、しゃべる、述べる、語る」。本稿では、カタカナで「イウ、ハナス、シャベル、ノベル、カタル」と表記する。本稿では、これら5語の意味・用法において、共通語と東北方言とでかなり大きな違いがあり、特に、カタルとシャベルにはその違いがめだつことを分析する。本稿の構成は、まず、共通語における発話動詞の意味分析を確認し、次に東北方言のカタル、シャベルの意味・用法が共通語と異なる点を観察し、共通語との比較を試みる。

方言調査においてよく用いられる方法としての調査票方式は本テーマには不向きである。なぜな

ら、カタルとシャベルは語形が方言と共通語において同一であるため、インフォーマント自身の内省の中で方言用法なのか共通語用法なのかの区別が曖昧になり、自然な方言用法と共通語用法を区別して採集することが難しくなるのである。また、特に共通語シャベルは、一定の言語的および非言語的文脈に支えられると使用範囲が広がる。したがって、質問票方式調査の場合、使えるという回答を得たとしてもその含意するところにインフォーマントの解釈の幅が大きく影響する。そこで、本稿テーマを考察するに当たり、刊行されている方言談話資料を用いて、発話動詞の使い分けに意識が向けられているのではない場面での自然発話において当該語がどのように使われているかを採集した。それらは、国立国語研究所(1981)『方言談話資料(5)―岩手・宮城・千葉・静岡―』、国立国語研究所(編)(2006)『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成第2巻岩手・秋田』、佐藤亮一(編)(2009)『都道府県別 全国方言辞典 CD 付き』:(方言辞典 CD と略記)、NHKスペシャル「孤立集落どっこい生きる」(2011年11月6日放映)である。

2 共通語発話動詞の意味分析

発話動詞とは、ふつう、共通語の「イウ、ハナス、シャベル、カタル、ノベル」の類義語5語をまとめてそのように呼ぶ。

本稿では、北邨香代子・中山晶子・村田知子・中道真木男(1977)(以降は北邨香代子他(1977)と記す)の発話動詞の意味分析に依拠する。北邨香代子他(1977)は、発話動詞の意味分析研究成果としてまとめた形のものとしては、もっとも早いものと思われる。柴田武他(1978)は有名であるが、北邨香代子他(1977)の方が早く、柴田武他(1978)の記述の中に北邨香代子他(1977)を参考にした旨が述べられている。なお、執筆者の一人の村田は、本稿筆者の旧姓であり、ここでは先行研究の引用というよりは筆者自身の考察として扱っている。以下、北邨香代子他(1977)から、共通語の発話動詞が持つ意味上の特徴をまとめる。

2-1 共通語シャベル

北邨香代子他(1977)に記述されているシャベルの意味の特徴をまとめると下記のとおりである。

- ①文体は話しことば的である。
- ②「シャベル」には、〈一方的なシャベル〉と〈相互的なシャベル〉とがある。
- ③〈一方的なシャベル〉は共同動作者格「〜と」をとらず、相手格「〜に」をとる。
- ④〈相互的なシャベル〉は、目的格「〜を」をとらない。「〜のことを」の形ならとる。
- ⑤「おシャベリする」で置き換えられるのは〈相互的なシャベル〉だけである。
- ⑥〈一方的なシャベル〉の目的語は、「秘密」のような〈他に知らせてはいけないこと〉である。
- ⑦〈一方的なシャベル「〜に シャベル」〉の機能は〈伝達〉である。
- ⑧〈相互的なシャベル「〜と シャベル」〉の機能は〈伝達〉ではなく〈雑談〉である。
- ⑨「シャベル」には聞き手との関係を意識しない、〈発話を急速かつ大量に続ける〉という意味がある。
- ⑩発話全体をくだけた感じにしたり、話の内容を「つまらないこと」

として扱って見せる効果を狙った用法がある。〈戯語的用法〉と呼ぶ。

2-2 共通語カタル

北邨香代子他（1977）に述べられている共通語カタルが持つ特徴のうち、東北方言との比較において注目すべき特徴として、下記のものあげられる。

- ①文体は書きことば的である。
- ②発話の内容は、引用格「ト」または目的格「ヲ」によって、文脈中に明示される必要がある。
- ③カタルのヲ格目的語になる名詞は、発話者が自ら言語化した内容である必要がある。すなわち、次のような用法は不自然である。「??ことわざをカタル」。また、「芭蕉の俳句をカタル」という用法においては、〈芭蕉の俳句そのものを誦するのではなく、芭蕉の俳句について何事かを語る〉という意味に解釈される。
- ④カタル動作は多くの場合、たくさんの発話の積み重ねであり、その中には何度かの質問・応答などのやりとりが含まれている。つまり、カタルという語は、聞き手が尋ね、語り手が答え、話すなど、多くの発話行動の結果として、ある「主観的事実」の内容が聞き手に「伝達」される、という言語行動を意味する。これに対して、イウは、1回ごとの発話について用いることが多い。カタルは個々の発話の集合である「談話」を指して用いることが多い。この、④にあるイウとの違いは、東北方言カタルの用法が共通語と異なる重要な点である。

3 東北方言シャベル

3-1 加藤正信（1969）「東北方言概論」の指摘

加藤正信（1969）に、以下のような指摘がある。

共通語と同じ語形であるが、意味内容が少しずれている単語は（中略）「シャベル」も「ちゃんとはよくシャベッテおいてくれ」のように普通の「話す」のニュアンスで使われているところが多い。（p.12）

3-2 平山輝男（1982）『北奥方言基礎語彙の総合的研究』の指摘

平山輝男（1982）は、語彙資料の中で次のような用例を上げ、また、分析を記述している。

- ムガスガタリ シャンベル（昔話を語る）
- アノシト ヨグ シャベル（あの人はよく喋る）
- ヨケダゴト シャベルナ（よけいなことを話すな）
- ユタリ シャンベレ（静かに話せ）
- セッセニ ナヤミ シャベタ（先生に悩みを話した）
- テマアノコドバリ シャンベテラ（自分のことばかり話している）
- ユツタリ シャンベテケレ（ゆっくり言ってくれ）

「言う」の意味でよく用いられ、「余計なことを口軽に話す」という悪いニュアンスはない。
(p.386、p.453 原文の表記のアクセントなどを省略した)

3-3 国立国語研究所(編)(2006)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第2巻 岩手・秋田』および国立国語研究所(1981)『方言談話資料 (5)―岩手・宮城・千葉・静岡―』に見られる用例。例文の【 】内は原資料に付された共通語訳であり、その訳語によって分類して掲出した。

3-3-1 国立国語研究所(編)(2006)には次のような用例が見られる(「ふるさと2巻」と略記、用例末の数字と記号は原資料の発話番号)。

3-3-1-1 共通語ハナスに相当する用例

- 1 キゲンバ ナンデモ オンベンデラ ヨンヌ シャンベンカ[°]
【たずねれば なんでも 知っているように 話すが】(「ふるさと2巻」20A)
- 2 ソレ、オットン ナッタ ステ ムグズンダンベ。ダレドステモ シャンベル アデモ ネ
ァスナー【ほら、夫に なった人は 無口だろう。だれであっても 話す あても ないしね】
(「ふるさと2巻」112A)
- 3 ナンニ シャベルデゴドォ ネァ【なに[を] 話すということも ない】(「ふるさと2巻」112A)
- 4 スゴド、キ、キグイカ[°] エスッカ シャンベラエネンダモ。【仕事 [を] ×、聞く以外しか 話
せなかったんだもの。】(「ふるさと2巻」112A)
- 5 ナン**ノ ヨーデモ キンゲバ コダエンカ、キガネバ ズブンツカラ シャンベルズ ゴ
ド ゼンゼン ナガッタンダ。【どんな**の 用でも 聞けば 答えるが、聞かなければ、[夫
が] 自分から 話すなんて こと [は] 全然 なかったんだ。】(「ふるさと2巻」179A)
- 6 アノー、ゴシューギノ チューンジャサマ、ナガナガ モンク ヨグ シャンベンダツケモナ。
【あの ご祝儀の 中座様[というのは] なかなか 口上 [を] よく 話すのだったものな。】(「ふ
るさと2巻」264B)

3-3-1-2 共通語イウに相当する用例

- 1 ナンヌスタッテ キイダラ インダガ マンツツ、シャンベツタラ インダガ【なんにしたっ
て、[なにを] 聞いたら いいのか まあ、[なにを] 言ったら いいのか [わからない。】(「ふる
さと2巻」20A)
- 2 ナンツタラ カシエキ[°] ヨーァ オシエ ッテモ シャンベラレダ ゴドァ ネァスナ。【なあに
働いても 働かなくても、どうしても「働き方が 遅い」とも いわれた ことは ないしな。】
(「ふるさと2巻」175A)
- 3 ソレンデ ワガネンダ ッテモ シャンベラレダ ゴド ネァ。【「それで [は] だめなんだ」と
も いわれたこと [は] ないしな。】(「ふるさと2巻」175A)
- 4 アレア シャベツタッテ ムンダダ ナッテ【「あいつは 言ったって 無駄だ」なんて [思っ

て]、】（「ふるさと2巻」177A）

5 コンナヤズサ シャンベタツテ ムンダダ ド オモツテ 【「こんなやつに 言たつて 無駄だ」と 思って】（「ふるさと2巻」177A）

6 アギラメンデ アレア シャンベナガツタンダベ。【諦めて あれ [=夫] は [私に] 言わなかつたんだらう。】（「ふるさと2巻」177A）

7 ゼーンゼン シャベナガツタ。【全然 言わなかつた。】（「ふるさと2巻」179A）

3-3-1-3 共通語シャベルに相当する用例

1 ウン ソーリエヌ ソノ、ホンヌンノ、トドサマ ナーニ スタツテモ シャベネンダガラ。【うん それに その 本人 [=当人] の 夫 [は] なに [を] したとしても しゃべらないんだから。】（「ふるさと2巻」217A）

3-3-2 国立国語研究所（1981）『方言談話資料（5）—岩手・宮城・千葉・静岡—』に見られる用例（「方言談話05」と略記、用例末の数字と記号は原資料の発話番号）

3-3-2-1 共通語イウに相当する用例

1 トショリ^ハモ ハー ア マズ ソーデスナ [84] ナンツノハ アン^ハマリ^ハル シャベネグナツタオネ。【老人も まず 「そうですね」などというのは、あまり 言わなくなつたね。】（方言談話05 I 岩手01：0507710| B）

3-4 佐藤和之（1996）『方言主流社会—共生としての方言と標準語—東北』の指摘

佐藤和之（1996）は、シャベルの使用の適否について、共通語話者と津軽方言話者に判定を問うた結果を表にしている（p.106）

その中から、共通語話者は絶対に使わないが方言話者は使う用例を取り上げて見ると、以下のとおりである。（×：その言い方が不可能であるもの。○：その言い方が可能であるもの。△：人によってゆらぎがあるもの）

表1（佐藤（1996）の表6から抜粋した）

共通語的表現	判定	判定	方言的表現
彼について喋る	×	○	彼ニツイテ喋ル
自分の意見をはっきりと喋る	×	○	自分のイケントバハッキリト喋ル
文句を喋る	×	○	文句トバ喋ル
早口ことばを喋る	×	○	早口言葉トバ喋ル
彼女は突然キヤーッと喋った	×	△	彼女ハ突然キヤーツテ喋ツタ
冗談を喋る	×	○	冗談トバ喋ル
お世辞を喋る	×	○	オ世辞トバ喋ル

祝辞を喋る	×	○	祝辞トバ喋ル
弔辞を喋る	×	○	弔辞トバ喋ル
Aで喋れば あの人は元気か	×	○	Aテ喋レバ アノ人ァマメシグシテラガ

そして、下記のように分析している。

いずれにしても、この表から、当地（筆者注：青森津軽方言）方言の「喋る」の意味範囲は共通語のそれに比べて相当に広く、共通語の「話す」や「言う」「語る」など、さらには「述べる」の領域までもを包括して表すことのできる**ことば**であることがわかる。

このような事情から、共通語でならば「いう」を用いる部分で、

22 そのことで 先輩から文句を喋ラれました

のような言い方をすることが多くなり、このシャベルの用法に不慣れなものには、ある種の違和感を与えることになるようである。その時の意識を問うと「共通語」であると内省する。これは方言のシャベルが、共通語のそれよりもその意味範囲が広いこと、言い換えれば、隣接類義語の意味までもを包括しているにもかかわらず、共通語と語形が同じであるために、その用法が方言的であることに話者は気づかないことによる。語形は共通語と同じであるが、意味的にずれているものを「義訛語」と呼ぶが、同様の視点からシャベルを見てみると、用法的にずれているものということになる。「用訛語」とでも命名することのできる表現である。(p.107)

3-5 井上史雄・吉岡泰夫(2004)『北海道・東北の方言—調べてみよう暮らしのことば』の指摘

井上・吉岡(2004)は、次のように述べている。

東京の「しゃべる」と違う使い方もあります。例えば「先生にしゃべる」は大事なことを先生に伝えるという意味です。東京なら告げ口するという意味です。

しかし、筆者は、これについては、「告げ口する」という極端な意味に解釈なくともいいのではないかと思う。共通語の「シャベル」の意味に、「口外してはいけないことを口外してしまう」という意味があるが、それと同じ意味・用法であると解釈すれば、共通語との違いはないと言える。井上・吉岡(2004)に具体的な用例がないので断定は難しいが。

3-6 佐藤亮一(編)(2009)『都道府県別 全国方言辞典 CD付き』に見られる用例

3-6-1 共通語ハナスに相当する用例

- 1 はずめてみんなのめあてでしゃべるどぎ、はっかはっかするなっす(初めて皆の前で話すときは、どきどきしますよ)(方言辞典 CD 岩手)

3-6-2 共通語シャベルに相当する用例

- 1 あのひとはどのあづまりでもかならずしゃべっども、やちやくちゃねごどすか言わね (=あのひとはどの集まりでも必ずしゃべるけれど、ろくでもないことしか言わない) (方言辞典 CD 山形)

3-7 佐藤朱美 (2011)「東北方言における発話動詞「シャベル」の意味範囲に関する考察」の指摘

佐藤朱美 (2011) に共通語とは異なる用法としてあげられている用例を分類した。インフォーマントは、青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県出身者である。

3-7-1 共通語イウに相当する用例

- (1) 昨日、電話したときは合田さんも「飲み会に行く」ってしゃべっていたけど、まだ来ないね。
(「引用文」+シャベル)
- (2) 山本さん家の赤ちゃんが初めて「おはよう」としゃべった。(「語形」+シャベル)
- (3) (隣の家の人に会ったのであいさつをしたが、返答がなかった場面)「おはよう」ってしゃべったのに返事もしなかった。(「あいさつ」+シャベル)
- (4) 彼女は素直にうなずいて「はい」としゃべった。(「返事」+シャベル)

3-7-2 共通語ハナスに相当する用例

- (5) 冬休みに田中さんと旅行に行くことになっているんだけど、そろそろ田中さんと旅行の計画をしゃべらないといけない。(「人と～をシャベル」)

3-7-3 共通語イウ、ハナスに相当する用例

- (6) (いつも無断でバックを使う妹のことを、姉は母親に告げ口している場面)
姉：妹がまた勝手に私のバック使ったの。
母：分かった。今度あの子にしゃべっておくから。(付随するニュアンス「小言を言う」)
- (7) (いつも無断でネックレスを使う姉に、妹は腹が立っている場面)
私のネックレス、いつも勝手に使うんだから…お姉ちゃんに今度ちゃんとしゃべっておこう。
(付随するニュアンス「文句を言う」)
- (8) 引越して、転校する可能性があることを先生にしゃべらなければならない。(付随するニュアンス「大事なことを伝える」)
- (9) 明日の天気について先生にしゃべった。(「大事ではないこと、どうでもいいことを口にする」)
- (10) この前、A君が万引きするのを見てしまったことを先生にしゃべった。(付随するニュアンス「告げ口する」)
- また、次のような記述がある。

関東から北上するにつれてシャベルの使用範囲が広がっているような気がしてならない。

この指摘は、本稿4-3で述べるように、宮城では「ざんぞ（〈陰口〉）」にカタルを用いるのに対して福島と栃木と茨城ではイウを用いるという現象および、福島では「へでなし／ひでーなし（〈いいかげんなこと、くだらないこと〉）」にカタルを用いるのに対して茨城ではイウを用いるというふうに、より北の方に共通語とは違う用法があることと相通じるように思う。

4 東北方言カタル

4-1 国立国語研究所(1981)『方言談話資料 (5)一岩手・宮城・千葉・静岡一』の指摘(原資料にある共通語訳は【 】内に記した。カタルに該当する語に筆者が下線を施した)

4-1-1 共通語ハナスに相当する用例

- (1) ンダゲント モゴモ ワガネガラナ ナーニ^へヌ カダッテンダベド オモッテ オント。【しかし、向こうの人も 分からないから 何を 話しているのだろうと 思っているのだよ。】(05 I 岩手01.0507111| B)
- (2) リヤグシ^へステ カダツカラネ。(中略)ン チョット ソノ ハヤイガラ ユックリ カダッテ クダサイ [75] ッタノ。ユックリ カダツタツケァ マダ ワガネ^へツン^へダオ。【略して話すのだからね。(中略)「ちょっと その 早いから もっと ゆっくり 話して 下さい」と言うんだ。ゆっくり 話したら、まだ 分からないと言うんだよ。】(05 I 岩手01.0507306| A)
- (3) ハー マワリ^へルクデグ ソノ トーリ^へル カダンネノ コノヘンデ アダリ^へルメナ キシ^へステ カダッテルオナ。【はあ まわりくどく、その 通り 言わないんだよ。このへんであたり前の 気で 話しているのだね。】(05 I 岩手01.0507413| A)
- (4) ナーニ^へヌ 〈カダッテル クソー [81] ド オモウナー〉。【なにを 話している、この野郎と思うなあ。】(05 I 岩手01.0507605| A)
- (5) (〈ナーニ^へヌ バーガナゴド カダッテル ギャーグニ^へヌ バガナゴド カダッテルド オモウダオナ〉。) オカ^へ ッタンダモノ ヤンベニ^へヌ カダッテ アダリ^へルメニ^へヌ カダッテモ イーノニ^へヌ (後略)【(なに 馬鹿なことを 話している、反対に 馬鹿なことを 話していると思うんだよね。) 育ったんだから ほどほどに 話をして、ふつうに 話してもいいのに】(05 I 岩手01.0507606| C)
- (6) ンデ ソゴサ [116] ヤラレダレバ ホガガラ キタヒトカ^へ ミーンナ カダルノサ シ^へズモンズン^へダツケド。【それで 面接の場に やられたら よそから 来た人は みんな 話しをする 質問をするそうだ。】(05 I 岩手01.0511203| C)
- (7) カグツモリ^へルデ コー カダラエンヤ【書くつもりで 話しをしなさいよ】(05 I 岩手01.0511804| A)

4-1-2 共通語カタルに相当する用例

※筆者はイウに相当すると解釈するほうがよいと思う。

- (1) 【ハイ^へエ、ワゲワ】 ハヤイト ユーゴドオ ハイ^へエト カダルゴドダオ。コリヤ ハヤイデシヨ。ハイ^へエデ フタツツダオ。ソノクシェ ツメデ カダッテ (C ハー) シ^へスムノダ。|【早い「早い」ということを「はいえ」と 語ることだよ。これは「はやい」でしょう。「はいえ」で 二つだものね。そのくせ つめて 語るのだよ。それで済むのだからね。】(05 I 岩手 01.0507206| A)

4-1-3 共通語イウに相当する用例

- (1) カエルデネクテ ビッキッテ カダッテ シ^へスマッタヨーナノド オナジ^へズデ 【「かえる」ではなくて「びっき」と 言って しまったようなのと 同じで 】(05 I 岩手 01.0507408| A)
- (2) オレ サギニ^へヌ ホントァ アノー オラ デイリドガ ナンツノ イマ カダル アレ (A デイリソメ [125] ダ。) ン。デイリソメネ 【俺が 先に 本当に あの 俺「出入」とか なんとこの、今 言っている、あれは。(A 「出入り初め」だ。)](05 I 岩手 01.0512108| B)
- (3) カドレイズノァ カドイレ デイリソメ ドツツ^へチ カダッテダнда ムガシ^へス リョーホー カダッテラガナー。【「門入れ」というのは、「門入れ」「出入り初め」どっちを 言っていたのだろう、昔、両方 言っていたのかなあ。】(05 I 岩手 01.0512509| A)

4-2 平山輝男 (1982) 『北奥方言基礎語彙の総合的研究』の指摘

平山輝男 (1982) には、八戸における用法として次の記述がある。

カダル①節をつけて言う。ナニワンプス ～ (浪花節を語る)。②「昔話を語る」は、ムガスガタリ シャベルという。(p.386 原文のアクセント表記は省略した)

①のように節をつけて話すという意味は、秋田と青森の例もあげられているが、本稿との関係で注目するのは、②に記述されている、「昔話」についてシャベルが用いられるという用法である。

4-3 佐藤亮一 (編) (2009) 『都道府県別 全国方言辞典 CD 付き』に見られる用例 (「方言辞典 CD」と表記)

佐藤亮一 (編) (2009) は、日常生活で広く使われている代表的な方言を各県の方言研究者が選定し、都道府県別に例文をつけて紹介した内容で、いわゆる「方言らしい語」が記述対象となっている。東北方言特有のシャベルとカタルの用例を集めるためには、例文にシャベルとカタルが偶然に用いられている場合が、本稿の資料として役に立つ。例えば「ざんぞかだる」という例文が福島「ざんぞ」という語に付けてあり、これはカタルの東北方言特有の用例として採用できる。そのようにして採取したカタルの用例は、下記のとおりである。

4-3-1 共通語イウに相当する用例

- (1) あのとゆーのはあっぺとっぺで何かだってんだがわけわがらね(=あの人の言うことは頓珍漢で何を言っているのかわからない)(「方言辞典 CD 宮城 あっぺとっぺ」)
- (2) あのとあまだそったないんぴんばりかだってんのすかや(=あの人はまたそんな気難しいことばかり言っているのですか)(「方言辞典 CD 宮城 いんぴん」)
- (3) そったにざんぞかだるんでがえん(=そんなに陰口を言うものではない)(「方言辞典 CD 宮城 ざんぞ」)

(3) と比較して、次の (a) (b) は、同じ名詞「ざんぞ」についてイウを用いた用例である。宮城でカタルを用いるのに対して関東寄りの福島と栃木ではイウを用いる点が注目される。

- (a) 姑のざんぞばっかし言う嫁(姑の陰口ばかり言う嫁)(「方言辞典 CD」 福島 ざんぞ) (b) 人のざんぞーしかいえねーやつにはごせーやけてしゃーね(=人の悪口しか言えないやつには腹が立ってしょうがない)(「方言辞典 CD」 栃木 ごせーやける)

- (4) へでなし、かだってんでねーど(=いいかげんなこと、言ってるんじゃないぞ)(「方言辞典 CD 福島 へでなし」)

(4) と比較して、次の (c) は、同じ意味の名詞(「へでなし」と「ひでーなし」)についてイウを用いている。福島でカタルを用いるのに対して関東寄りの茨城ではイウを用いる点が注目される。

- (c) ひでーなしばがりゆってんじゃないねーよ(=くだらないことばかり喋ってるんじゃないよ)(「方言辞典 CD 茨城 へでーなし」)

4-3-2 共通語シャベルに相当する用例

- (1) あえづあいつもかっつもへらへらかだってばりいる(=あいつは、始終おしゃべりばかりしている)(「方言辞典 CD 宮城 いっつもかっつも」)
- (2) 人のわるぐちばりかだっていねで(=人の悪口ばかりしゃべらないで)(「方言辞典 CD 山形 かだる」)

※筆者はイウに相当すると解釈する方が適切だと思う。

4-4 加藤雅啓(2019)「山形方言カタルが持つ意味特徴」の指摘の指摘

加藤雅啓(2019)が、山形方言話者への調査および、佐藤和之(1996)のシャベルについての調査結果の表(p.106表6)を用いてカタルの使用を調査した結果から述べていることをまとめると、下記ようになる。

- (1) 共通語イウに相当する下記の用法を、80~90%の話者が肯定した。

- ①文句/独り言/冗談/お世辞をかたる
- ②人の悪口ばかりかだってんなず
- ③あいづあ何かだってんだがわがね
- ④そげんごどかたんのはやめろ

- ⑤ちゃんとかたらっしえ
- (2) 共通語シャベルに相当する下記の用法を、80～90%の話者が肯定した。
- ⑥べらべらかだってんなず。
- ⑦授業中かたってばりいる
- (3) 共通語ハナスに相当する用法はほとんど肯定されない。特に20代においては下記例文のどちらも、〈使う〉と回答した人は0人であった。
- ⑧はじめでみんなの前でかだるどぎ、どぎどぎするなっす
- ⑧その話は私からあいづにかだっどぎます

4-5 TV 採集用例

4-5-1 共通語イウに相当する用例

(1) 正直語ると

(阿部倉吉さん(歌津のクラさん)の発話 2011/11/6 NHK スペシャル「孤立集落 どっこい生きる」宮城県本吉郡南三陸町 馬場中山集落 避難所閉鎖の宴会における会話)

5 まとめ

上述の東北方言の用法の観察から、次のことが言える。

5-1 共通語シャベルは、ハナスとイウが一般的で広く用いられるのに対して、文体的および語義的特徴が濃い語であるが、東北方言シャベルは、共通語イウやハナスと肩を並べる「普通に用いられる語」のようである。共通語と異なる顕著な用法は、次のようなものであると言える。

- ①共通語のイウの持つ意味領域を大きくカバーする。「おはよう」とシャベル」のような、「 」によって引用される部分に後接する用法や、「文句 / 小言をシャベル」という用法は東北方言に特有である。
- ②「人と～をシャベル」という用法は、共通語にはない。(「田中さんと旅行の計画をシャベル」佐藤朱美(2010))。共通語用法について、北邨香代子他(1977)に、「〈相互的なシャベル〉は、目的格「～を」をとらない」「～のことを」の形ならとる」と分析されていることと異なる。
- ③共通語ハナスの意味領域もカバーする。

5-2 東北方言のカタルの用法が共通語と相当異なることは、従来はほとんど指摘がない。共通語と異なる顕著な用法は、次のようなものであると言える。

- ①北邨香代子他(1977)では、「カタルは個々の発話の集合である「談話」を指して用いることが多い」と分析されているが、東北方言カタルはそういう制限が見られない。

②共通語ではイウを用いる場合に対してカタルを用いる用法がある。「文句／独り言／冗談／お世辞／悪口をカタル」であり、少なくとも山形方言に存在することが確認されている。

5-3 東北方言カタルが共通語ハナスに相当する用法は、方言談話資料には多くみられるが、最近では廃れてきている地域も存在する。加藤雅啓(2018)の20代インフォーマントの回答を見ると、山形方言においてはそのことが認められる。

5-4 共通語とは異なるシャベルとカタルの用法の存在のしかたは、東北方言内部において異なり、北に行くほど共通語との隔たりが大きいのではないだろうか。佐藤朱美(2010)の記述、および佐藤和之(1996)の用例から推察されることである。

参考文献

- 井上史雄・吉岡泰夫(監修)(2004)『北海道・東北の方言—調べてみよう暮らしのことば』ゆまに書房
- 加藤正信(1969)「東北方言概論」『言語生活』210
- 加藤雅啓(2020)「山形方言カタルが持つ意味特徴」『外国語学会誌』49号 大東文化大学外国語学会
- 北邨香代子・中山晶子・村田知子・中道真木男(1978)「発話行動を表す動詞の意味分析」『日本語教育』34号73-93、日本語教育学会
- 佐藤和之(1996)『方言主流社会—共生としての方言と標準語—東北』地域語の生態シリーズ おうふう
- 佐藤朱美(2011)「東北方言における発話動詞「シャベル」の意味範囲に関する考察」『外国語学会誌』40号 大東文化大学外国語学会
- 佐藤亮一(編)(2009)『都道府県別 全国方言辞典 CD付き』三省堂
- 国立国語研究所(編)(2006)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第2巻 岩手・秋田』国立国語研究所資料集13-2 国書刊行会
- 国立国語研究所(1981)『方言談話資料 (5) —岩手・宮城・千葉・静岡—』国立国語研究所資料集10-5 秀英出版
- 中道知子(2013)「東北方言発話動詞「カタル」と「シャベル」の意味用法について—共通語との違いに着目して—」『日本語学科20周年記念論文集』43-55、大東文化大学日本語学科
- 平山輝男(1982)『北奥方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社